



TATにおける時間性の検討ーナラティブ・アプローチの立場からー

楠本, 和歌子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2015-03-25

(Date of Publication)

2017-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第6347号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1006347>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



— 博士論文内容の要旨 —

氏名： 楠本 和歌子

専攻： 心身発達専攻 人間発達論講座

指導教員氏名： 森岡 正芳 教授

論文題目： TAT における時間性の検討—ナラティブ・アプローチの立場から—

論文要旨：

本論文は、ロールシャッハ・テストと並ぶ代表的な投射法でありながら、その基本的性格や分析・解釈法の曖昧さ故に使用頻度の低い TAT について、現場のアセスメントから一旦離れ、基本的性格の一つである物語性についてナラティブの視点から検討することを目的とした。なお、物語性の中でも、物語の流れとして理解されている時間性の問題に本論文は着目した（第1部）。

第2部は、理論的検討を行った。まず、TAT に関する先行研究を整理し、＜テスト性・客観性＞＜物語性・主観性＞の二側面を有することが TAT の基本的性格の一つであることを確認した。次に、＜物語性・主観性＞を重視する立場の中でも、ナラティブの視点とそれ以外の視点では物語理解がどのように異なるかを検討し、後者は主に『検査者との関係性』『非言語的側面』を、前者は主に『物語の流れ』を活かして理解していることを明らかにした。そして、先行研究では曖昧であったナラティブの視点の定義を、『TAT のプロトコルを、（1）視点の二重性、（2）出来事の時間的構造化、（3）他者への志向という3つの特徴を有する語りとして理解すること』と明確にした上で、物語の流れとは出来事の時間的構造化（出来事を選択と配列）であること、そこにはストーリーとプロットという二種類の基準が存在することを考察した。さらに、両方の基準に影響を与えるものとして、因果関係に基づく論理的な基準が TAT にはあること、教示の『これまで・今・これから』はこの基準を意味することを指摘した。加えて、TAT の時間性には、プロトコルに示され

る物語の流れだけでなく、実施日時や全体反応時間、初発反応時間といった物理的な時間や、被検者の時間的展望の投射として語られる心理的な時間も含まれることから、野村（2010；2012）の系列時間論に依拠して、TAT の枠組み内の時間概念を A～E 系列の時間の言語で整理し直し、TAT 反応の多様な時間性について、全体的な理解を得ることができた。また、投射仮説に基づく従来の分析・解釈は、プロトコルに投射される被検者のパーソナリティ特性を明らかにするのに対し、ナラティブの視点による分析・解釈は、物語の流れに反映される被検者の意味連関を明らかにするものであることを明示した。

上記の理論的知見に基づいて、第3部から第5部では臨床研究を行った。第3部では、従来の分析・解釈において、物語の流れを過去・現在・未来に3区分する際の分類基準を探索的に検討した。坂部（2008）の物語の時制論に依拠しながら、主人公の人称性によって協力者 29 人（図版 4 枚分）の物語を分類した結果、図版の状況から結末までの構造化に違いが見られた。三人称群は結果としての出来事を語りやすいのに対し、一人称群は、出来事としては図版の状況から展開していない代わりに、図版の地点からその後の結果を予想したり願ったりする語りが起きやすかったのである。これは、主人公を一人称で語った場合は、『私が、（図版の主人公である）私について語る』構造となり、セルフ・ナラティブの『私が、私について語る』構造に近くなるのに対し、主人公を三人称で語った場合は、『私が、彼について語る』構造となり、セルフ・ナラティブから遠ざかるために構造化の違いが生じたと考えられた。その結果、従来の分析・解釈において過去・現在・未来に3区分する際は、出来事のみに注目するのではなく、主人公の人称性と、物語の時制を加味して分類した方がよいという仮説が生成された。

第4部では、時間喪失の物語（時間的流れが生じていない物語）に着目し、ナラティブの視点から読んでいくならばどのような解釈可能性があるのか、そこには被検者のどのような意味世界が反映されるのかを探索的に検討した。S さん（60 歳代女性）の物語に対して、パラディグマティック、シンタグマティックというソシール言語学の概念と、Ricoeur, P. の統合的形象化概念、Sullivan, H. S. の発達理論を基に解釈した結果、S さんの物語はパラディグマティック優位で、統合的形象化が不完全であることが明らかになった。これを病理と見るのではなく、聴き手による再形象化によって、今後物語になる可能性を秘めていることが考察された。そして、ナラティブの視点が、時間喪失の物語に肯定的・発展的な解釈を付与できる可能性を強調した。

第5部では、物語の流れの分析視点を検討することを目的として、発話以前の次元であ

る内言に着目し、中村（2014）の内言の意味論に依拠しながら、M さん（40 歳代男性）の TAT にナラティブの視点から解釈を試みた。その結果、（１）セルフ・ナラティブの連続線上にある語りとして読む、（２）物語の流れがどの系列時間を中心に行っているか判断する、（３）語り手の構成する意味連関を読む（具体的には、意味が平面的に並置されている網目状の視覚イメージを思い浮かべながら、ドミナントな意味が何かという観点から物語を読む）、（４）ドミナントな意味の中から、直線的な展開がイメージできる意味を拾い上げ、そこから物語のプロットが何であるかを読む、（５）TAT に表れたプロットとセルフ・ナラティブとの対応を検討する、という分析視点を仮説として生成した。また、投映仮説に基づく従来の分析・解釈にはない、ナラティブの視点による分析・解釈の特徴として、TAT で明らかになる被検者の特性のうち、書き換えの可能性をもった生成的で動的な側面を強調すること、数枚ではなく 20 枚すべての図版の実施を重視することを挙げた。

第 6 部では、総合的考察を行った。まず、木村（1982）の時間論に依拠しながら、A 系列と B 系列・C 系列の時間を混同しやすい理由について考察した。その結果、B 系列・C 系列に基づく時間的構造化を行うためには、自己の連続性感覚と、そこから生み出される『今・この自分』という起点が前提条件となること、そして、A 系列の本質は自己の連続性感覚であり、それは生の既存性と死の未知性に関わっていることを明らかにした。次に、ナラティブの視点と Murray,H.A. の人格理論との親和性について考察を行った。その結果、ナラティブの視点は、少なくとも理論的原点が Murray,H.A. と同じであり、またパーソナリティの同じ部分に注目していることから、一般的な分析・解釈からかけ離れた外れ値的な存在ではないという結論を得た。最後に、本論文で得られた知見を、『TAT の時間性とは何か』という問いに応える形で整理した。そして、これらの知見はあくまで仮説生成の第一歩であり、現段階では一般化することはできないという本論文の限界を述べた。そのため、今後の課題として、今回生成された仮説を足がかりにして仮説の生成と検証を循環させながら、時間性に関する新たなモデルを生み出していくこと、ナラティブの視点が TAT にどこまで貢献できるか、その射程を定めるために Murray,H.A. の人格理論に関する更なる考察が必要であることを挙げた。これらの課題を踏まえた上で、ナラティブの視点は TAT に新たな時間性理解を生み出す可能性を有していること、更には、TAT に限らず心理検査の文脈をナラティブの視点から捉え直すことで、そこで語られる時間と、時間について語る行為が書き換えられる可能性があること、その可能性は心理検査領域における研究・実践の発展に大きく寄与するものであることを展望として述べた。

論文審査の結果の要旨

氏 名	楠本 和歌子		
論文題目	TATにおける時間性の検討 ーナラティブ・アプローチの立場からー		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教 授	森岡 正芳
	副 査	教 授	吉田 圭吾
	副 査	准教授	齋藤 誠一
	副 査	京都橘大学 教授	中村 和夫
	副 査	名古屋市立 大学教授	野村 直樹
要 旨			
本論文は、TATの時間性に関して仮説生成型研究を行ったものであり、以下の6部から構成されている。 第1部：TATの特徴および問題点を概観し、分析・解釈に関する研究上の課題を検討した。その結果、①従来の分析・解釈では、検査における教示『これまで・今・これから』と、過去・現在・未来という時間軸との関連が十分に検討されていないこと、②物語作成という立場からの分析・解釈でも同様であること、③TAT研究では、過去・現在・未来、時間軸、時間的な流れといった時間に関する用語が明確に定義されないまま使用されていること、④上記①～③がTATの分析・解釈を困難にしている一因であることを明らかにした。その上で、①ナラティブの視点から時間性に関する概念の理論的整理を行うこと、②従来の分析・解釈における過去・現在・未来の3区分によって時間を分析する方法について、再検討を行うこと、③ナラティブの視点によるTAT分析・解釈視点の仮説生成を行うこと、④それによってTATはパーソナリティのどのような側面を明らかにするかを考察すること、以上を目的として、本研究を行った。 第2部：目的①に関して、時間性に関する概念の理論的検討を行った。まず、TATの先行研究を整理し、TATが＜テスト性・客観性＞＜物語性・主観性＞の二側面を有することを確認した。次に、＜物語性・主観性＞を重視する立場の中でも、ナラティブの視点とそれ以外の視点では物語理解がどのように異なるかを検討			

し、後者は主に『検査者との関係性』『非言語的側面』を、前者は主に『物語の流れ』を活かして理解していることを明らかにした。ナラティブの視点について『TATのプロトコルを、(1)視点の二重性、(2)出来事の時間的構造化、(3)他者への志向という3つの特徴を有する語りとして理解すること』と明確にした上で、物語の流れとは出来事の時間的構造化であること、そこにはストーリーとプロットという二種類の基準が存在することを考察した。さらに、野村（2010；2012）の系列時間論に依拠して、TATの枠組み内の時間概念をA～E系列の時間の言語で整理し直し、TAT反応の多様な時間性について理解の包括的な枠組みを立てた。

上記の理論的知見に基づいて、第3部から第5部では臨床研究を行った。

第3部：TAT分析・解釈において、物語の流れを過去・現在・未来に3区分する際の分類基準を探索的に検討した（目的②に対応）。坂部（2008）による物語の時制論に依拠し、協力者29人の4つの図版を用いたTAT反応を主人公の人称性によって分類した結果、過去・現在・未来の時間区分において、出来事のみに注目するのではなく、主人公の人称性と、物語の時制を加え分類することで、分析の精度が高まるという仮説を導いた。

第4部：時間喪失の物語（時間的な流れが生じていない物語）に着目し、ナラティブの視点による解釈可能性と、被検者のどのような意味世界がTAT反応に反映されるのかを探索的に検討した（目的③④に対応）。臨床事例の検討を行い、そのTAT反応について、Ricoeur(1984)のナラティブ論とSullivan(1953)の発達理論をもとに解釈した結果、事例のTAT反応は統合的形象化が不完全であることが示されたが、これを病理と見るのではなく、聴き手の応答による再形象化によって、物語が形成される可能性が潜在することを考察した。

第5部：ナラティブの視点による分析・解釈視点の検討を目的として、発話以前の次元である内言に着目し、中村（2014）の内言の意味論に依拠しながら、研究協力者のTAT解釈を試みた（目的③④に対応）。その結果、語り手の構成する意味連関について、ドミナントな意味を中心にして読解する分析視点を導くことができた。この視点によって、TAT反応内容に反復するプロットの意味連関を明らかにすることができ、被験者のライフテーマの把握に寄与するという仮説が示された。

第6部：総合的考察では、木村（1982）の時間論に依拠しながら、A系列・B系列・C系列時間の臨床的な意味を考察した。そしてTAT創始者Murray(1938)においても、ナラティブの視点が、パーソナリティ研究の理論的原点となることを指摘した。

本研究は、TATの時間性について、先行研究の問題点をふまえながら、理論的・臨床的な検討を行った独創性の高いものである。データの収集、分析・解釈も適切である。これまで解明されてこなかったTATの時間性について、ナラティブの視点から多角的に研究した点で、TAT検査法の基礎研究を進めたものと認められる。よって本審査委員会は、学位申請者楠本和歌子が博士(学術)の学位を得る資格があるものと認める。

なお本論文に関わり、3編の論文が発表されており、うち以下の2編が査読付き論文であるので、候補者は博士論文提出要件を満たしている。

① 田淵和歌子（2012）TAT物語における人称性と時間性の探索的検討：図版1の分析 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 5(2), 27-37.

② 田淵和歌子（2013）ナラティブ・アプローチによるTAT物語の検討 人間性心理学研究 30(1・2), 39-51.